

渡たまふゆゑ名づけたり、中頃より神橋と呼ぶ、橋の行桁三通あり、これを乳の木といふ、西の端一の乳の木引籠し所を、龍宮へ通じけるよしいひ傳ふ、此橋の内に明神を勸請あるゆへ、常に雜人あるは不淨の者をわたさず、橋かけかへの時は神事法樂の規式あり、

〔遊囊賸記 二十四〕山菅橋一名ヲ神橋トイフ、大谷川ニカ、ル、川ノ此方ニヨリテ高坐石アリ、勝道上人勤行ノ處ト言傳フ、

〔夫木和歌抄 橋 二十一〕題不知 懷中 中略

よみびと 玄らす

おいのよにとしをわたりてこぼれなばねづよかりける山すげのはし

〔廻國雜記〕日光山に 略 山すげの橋とて深秘の子細ある橋侍り、くはしくは縁起に見え侍る、又顯露にゑるし侍るべきことにあらず、

法の水みなかみふかくたづねずばかけてもゑらじ山すげのはし

〔東路のつと〕日光山 略 坂本の人家は數をわかず續きて福なる地とみゆ、坂本より京鎌倉の町有て市の如し、こゝよりつゝらをりなる岩にも傳ひてよぢのばれば、寺のさまあはれに松杉雲霧まじはり、檜檜原の峯幾重ともなし、左右の谷より大なる川流出たり、おち合ふ所の岩のさきより橋あり、長四十丈にも餘りたらん、中を反らして、柱もたてず見えたり、山菅の橋と昔よりいひわたりたるとなむ、此山に小菅生ると万葉にあり、ゆへある名と見えたり、

〔日光山堂社建立舊記 上〕山菅橋

寛永十三年東照宮二十一回御忌、公卿御門跡御登山、

三條實修卿

山菅のかけてあやうき古橋を石を柱にわたる御代かな

朝鮮國 溱溘齋詩

偶入壺中一破顔、竭來橋上俯晴灣、蒼龍倒飲千層浪、王璵斜連兩岸山、秋後客疑鐫渚過、夜深人似月